

中国近代文学における自然観の変容

—郭沫若の新詩誕生をめぐって—

TIEPh 特別研究員 横打理奈

キーワード：自然観・郭沫若・新詩・『時事新報』副刊
『學燈』・科学

はじめに

中国文学において自然に関心を持ちそして作品、特に詩に読み込むことは『詩経』の時代から唐詩を経て現在まで続く文学の特徴と言える。そのような文学観を持つ中国において、民国期には自然観が変容したと考えられる。特に、民国初期において、新詩という口語自由詩を確立したといわれる郭沫若（1892—1978）は、その文学の中に自然科学の思想を自由に取り入れたといえる。

郭沫若の第一詩集である『女神』は1921年8月5日に泰東図書局より発売された。その『女神』刊行後に、巻頭作品である「序詩」が改めて同年8月21日『時事新報』の副刊『學燈』に掲載された。

序詩

我是無産階級者：

因爲我除個赤條條的我外，
什麼私有財産也沒有。

「女神」是我自己産出來的，
或許可說是我的私有，
但是，我願意成個共產主義，
所以我把她公開了。

○

「女神」喲！

你去，去尋那與我的振動數相同的人！
你去，去尋那與我的燃燒點相同的人。
你去，去在我可愛的青年的兄弟姊妹胸中
把他們的心弦撥動，
把他們的智光點燒罷！

私は無産階級者、

丸裸の私を除いて、
なんの私有財産もないからだ。

『女神』は私が作り出したもの、
或いは私の私有とも言えるかも知れない。

しかし、私は共產主義者でありたいが故に、
彼女を公開した。

『女神』よ、

行け、私と振動数の同じ人のところに、
行け、私と燃焼点が同じ人のところに、
行け、愛する若き兄弟姊妹の胸中に、
彼らの心の弦を揺り動かし、
彼らの智の光を灯すのだ。

これまでの評価において、この詩が注目されてきたのは前半第一連の「無産階級者」「共產主義」という語彙である。それは郭沫若の政治思想を明確に表したものである¹。

しかし、また好評を博したためであろう、『女神』がほどなく再版されるに及んで、その広告が『時事新報』に掲載された時、そこに引用されたのは「序詩」の第二連の方であった。注目すべきは第二連の「振動数」「燃焼点」が科学用語であったことである。第一連では思想が同じ人に向かって声を上げているのに対し、第二連では、心が震えたり燃えるような思いを「振動数の同じ人」「燃焼点と同じ人」と表現したのである。自然科学用語で表現し、自らの心情を語っている、という点は注目すべきことである。この表現はまさしく『學燈』が重視していた、科学の視点から世界を見る、という理念と呼応するものであった。

本稿では、郭沫若はどのような作品を発表し、そこで郭沫若の『女神』収録作品が多く掲載された『時事新報』の副刊『學燈』の構成について、従来の単なる文芸欄という位置づけから一步踏み込んで、『學燈』自体がどのような性格の媒体であったのか、郭沫若自身の作品をもとに、新詩が掲載されるに至った過程を明らかにし、郭沫若の作品における伝統的な世界と、西洋の思想や文学、また科学の知識などの混在がどのように体现されていくのか、考察してみたい。

一 郭沫若と『時事新報』副刊『學燈』

郭沫若が口語自由詩を発表した『時事新報』の副刊『學燈』は、1918年3月4日に創刊された。『學燈』欄は新文学を支えてきた文芸欄と一般には言われるが、その内実は複雑である。そもそも、新文学を支えてきた媒体としては、やはり『新青年』ⁱⁱの役割は大きかったが、しかし当時の新聞あるいはその副刊もまた、新文学を支える大きな役割を担っていた。このことについては既に研究があり、この『時事新報』の『學燈』以外には、『晨报副刊』・『民国日報』の副刊『覚悟』・『時報』の各副刊があげられ、これを四大副刊と呼ばれているⁱⁱⁱ。ここでは、これらの副刊と時期を同じくして新文学を支えた『時事新報』副刊『學燈』について、どのような位置づけにあり、郭沫若が投稿していくことになった口語自由詩の位置づけを探してみたい。

なお、今回の調査では『時事新報』を1918（民国7）年1月から1921年（民国10）年12月までに限定している。『時事新報』自体はその後長く続く新聞ではあるが、今回の調査目的が『學燈』における新詩の誕生とその発展を追うことにあり、またこの時期はちょうど郭沫若が新詩を投稿して掲載されている時期である。よって、期間を区切って調査することにした。

二 『時事新報』における文化面の変遷

『時事新報』の前進は1907年に創刊された『時事報』であるが、改称されたのは1911年5月18日であり、1913年には梁啓超の研究系の機関誌となった新聞である^{iv}。

『時事新報』と言えば副刊の『學燈』の存在は大きくよく知られているが、はじめから紙面として存在したのではない。『學燈』創刊の前日は、以下のような構成をとっている。

「報餘叢載」のみの時期（1918年3月3日）

第一張 第一版 広告と啓事

	第二版	「時評」「命令」「北京專電」「本國專電」「各國電訊」「内外要聞一」
	第三版	「内外要聞一」(続き)
	第四版	広告
第二張	第一版	「本埠時事」
	第二版	「内外要聞」(接第一張第三刷)「時評二」
	第三版	「時評二」(続き)「專件」
	第四版	広告
第三張	第一版	「報餘叢載」:「黒幕」「劇壇」
	第二版	「内外要聞二」「新聞屑」:「中外新聞屑」「本埠新聞屑」
	第三版	「本埠時事」「時評三」

「報餘叢載」というものが一面だけある。ニュース以外の紙面であるが、内容は虚実入り交じった暴露記事である「黒幕」と、観劇のエッセイの「劇壇」の、娯楽欄があったに過ぎないが、これは『學燈』の前からずっと存在していた紙面である。具体的にどのような記事が掲載されていたかという、例えば1918年3月18日の「黒幕」は二つ掲載され、一つは火事における保険賠償をめぐるやり取りをノンフィクション風に記しており、もう一つは巫医の行う鐵気が連載されている。これら以外には一コマ漫画が掲載され、娯楽性が強いが文芸的な性格は低いことがわかる。次に「報餘叢載」と『學燈』が並行して存在していた時期を見てみよう。

「報餘叢載」と『學燈』の並行期(1918年3月4日)

第一張	第一版	広告と啓事
	第二版	「時評一」「命令」「北京專電」「本國專電」「各國專電」「内外要聞」
	第三版	「内外要聞」(続き)
	第四版	広告
第二張	第一版	「本埠商情」
	第二版	「内外要聞」(接第一張第三刷)「時評二」
	第三版	「時評二」(続き)「專件」
	第四版	広告
第三張	第一版	『學燈』:「宣言」「教育小言」「學校指南」「青年俱樂部」 「新聞屑」:「中外新聞屑」「本埠新聞屑」
	第二版	「本埠時事」
	第三版	「本埠時事」(続き)「時評三」
	第四版	「報餘叢載」:「黒幕」「劇壇」

詳しくは後述するが、目次の内容を見てわかるように『學燈』は教育記事が充実している。元々『時事新報』には「教育界」という教育関係の記事を掲載しているものもあったが、『學燈』は記事というよりも論調が多くあり、同じ教育関係記事を掲載していたが、「教育界」とは性格が異なっていたと考えられる。そのため文芸欄という性格は弱かったと考えられ、文芸欄の役割はこれまで通り「報餘叢載」が担い、娯楽面としての性格がま

だ強かった。元々『學燈』は週刊として創刊されたが、1918年12月からその発行の期間が徐々に短くなり、週刊としての体裁が崩れ日刊に近い状態になっていく。

文芸欄が充実しだした時期（1918年12月30日）

- | | | |
|-----|-----|-------------------------------------|
| 第一張 | 第一版 | 広告と啓事（公示） |
| | 第二版 | 「論説」「命令」「北京專電」「本國電訊」 |
| | 第三版 | 「各國電訊」「公電」「内外要聞」 |
| | 第四版 | 広告 |
| 第二張 | 第一版 | 広告 |
| | 第二版 | 「内外要聞」（接第一張第三刷）「時評一」 |
| | 第三刷 | 「時評一」（続き） |
| | 第四刷 | 広告 |
| 第三張 | 第一刷 | 「學燈」：「講壇」「思潮」「科学叢談」「佛門彙載」 |
| | 第二刷 | 「本埠時事」 |
| | 第三刷 | 「本埠時事」（続き）「時評二」「商情調査」 |
| | 第四刷 | 「報餘叢載」：「小説」「遊記」「專載」「中外新聞屑」「劇壇」「新魔術」 |

1918年12月22日に毎週日曜日に『星期増刊潑克』が創刊される。そこには一コマの風刺漫画や詩・小説などが紹介されるようになり、「報餘叢載」は依然として娯楽欄ではあったが、『時事新報』としての体裁の中では『星期増刊潑克』が発行されたことにより文芸欄としての役割を担うようになってきたことが注目される。

その後、『學燈』は当初教育関係の記事だけだったものが、次第に拡充されて文芸欄としての役割を果たすようになり、やがて1919年2月4日から正式に日刊化する。日刊から半年後の1919年8月15日に最初の新詩が掲載されるようになる。郭沫若の「序詩」が掲載された時は既に『學燈』の構成は安定しており、以下のようにになっている。

郭沫若の「序詩」が掲載された日（1921年8月26日）⁴

- | | | |
|-----|-----|--|
| 第一張 | 第一版 | 広告と啓事 |
| | 第二版 | 広告 |
| | 第三版 | 広告「評論」 |
| | 第四版 | 「評論」（続き）「国内專電」「本國電訊」「各國電訊」「公電」「快信」「國外要聞」「國內要聞」 |
| 第二張 | 第一版 | 「國內要聞」（続き）「赤俄通信」 |
| | 第二版 | 「國內要聞」（続き）「命令」「專件」 |
| | 第三刷 | 広告 |
| | 第四刷 | 広告 |
| 第三張 | 第一刷 | 「本埠時事」 |
| | 第二刷 | 「本埠時事」（続き）「公布欄」「進出輪船」 |
| | 第三刷 | 工商界「講譚」「電訊」「北京快信」「金融」「市況」 |
| | 第四刷 | 「外埠」「經濟大觀」「本埠金融」「本埠商情」 |

第四張 第一刷 『學燈』:「労働問題」「現代哲学界」「教學法討論」「詩」「哲學研究」「通信」

第二刷 「通信」(続き)「文字研究」

『學燈』に設けられている「詩」は、ここでは郭沫若の「序詩」のみが掲載されている。ところで『學燈』に掲載される詩はあくまでも新詩であり、実は旧詩は「報餘叢載」に掲載され、そこでは「舊文藝」という項目をわざわざ立てていた。元々文化欄の役割は「報餘叢載」が担っていたが、徐々に『學燈』が新文芸を、「報餘叢載」が旧文芸と役割分担をして文芸欄として担っていたが、その後文芸といえは新文芸を指すようになり、郭沫若の「序詩」が掲載されるころには「詩」として書かれていても、読者は新詩であることを承知するようになっていたのである。

ところで、先述した『星期増刊潑克』には風刺漫画などが掲載されている。この「潑克」とは punch (パンチ) の音訳である^{vi}。この『星期増刊潑克』は 1919 年 11 月 16 日を最後に終了する。これは文芸欄としての役割が『學燈』に完全に移ったことを意味している。また 1921 年 5 月 10 日より『時事新報文学旬刊』^{vii}という毎月十日毎に文芸欄を充実させるあらたな文芸欄の登場など、『時事新報』は読者に強く訴えていたことがわかる。1921 年 9 月 16 日から『社會主義研究』という欄を設けた。これまで『學燈』でも「社會主義」については翻訳や新書の紹介などをしてきたが、ここで思想と文芸が別という意識が如実に表れてきたことを示すものである。

三 『學燈』構成内容の変遷

前節で見たような『學燈』欄の教育欄から文芸欄を含めた総合的な文化欄がどのように構成されたのか見ていこう。『學燈』が始まるのが 1918 (民国 7) 年 3 月 4 日である。それ以前にはこの欄は存在せず、同年 1 月 24 日よりほぼ毎日、『學燈』の告知が掲載される。その告知欄は以下の通りである^{viii}。

本紙はそもそも社会の退廃や青年の墮落を残念に思い、根本的な治療法はただ教育事業だけが頼みであると考え、そこで元々の教育面を拡張し、名前を「學燈」と改めた。その内容は次の通り分かれる。(一) 学校指針 教育法令や学校規約を視察報告等掲載し、学生及び就学希望者を判断する指針にしたい。(二) 青年俱樂部 各校の教員及び学生諸君の投稿専用として、青少年の心身に益にするものであれば内容がどんな分野のものであっても、文章がどんな長さであつても歓迎する(掲載者には景品を贈る)(三) 教育小言 これは興味をわきたたせ修養を補助するもので、そのどれもが私たちが微力を尽くして願っているもので、自ら学界を照らす灯火たらんとするものではない。しかし最初のちっぽけな志に違ふことないよう、幸いに国内外の明達の教授があること、ここに予告したい。^{ix}

『學燈』が創刊されるまでは、『時事新報』には教育事項についてはまとまった記載がなく、個々に掲載されているような状態であった。そこでここではじめて教育についての提言が

なされたのである。そもそも予告欄に示すように、教育の重要性は社会や青年の衰微墮落に繋がる問題であり、深刻なものと考えていたことがわかる。

そこで『學燈』創刊から7ヶ月経過した1918年9月30日の「教育小言」には「記者」名で「本欄之提唱」として『學燈』欄の姿勢が述べられており、そこには「社会主義」「教育制度」「教育事情」「教師」「学風」「原有文化」「西方文化」を重要視していることを述べている。

「本欄の提唱」

本紙が「學燈」欄を開設して以来、投稿は途絶えることなく、それぞれどの記事も社会に貢献できているようだ、本紙としてはなおそれぞれの主張の中で特に重視したいところを記して読者の目を開かせ、投稿諸氏が或いはまた選択することを願うものである。

- | | |
|------------|---|
| 一、社会主義について | 道德感化の人格主義を提唱し、職業教育の實用主義のたすけをする |
| 二、教育制度について | 前例にしたがうだけの制度に反対し、固執して変わろうとしない制度にも反対する |
| 三、教育事情について | 各種教育の弊害を暴く |
| 四、教師について | 「以身作則」の良い教師を改造することを主張し、現在の悪い社会と同じく汚れた教師に反対する |
| 五、学風について | 活発で質実な学風に改造し、現在のやる気のない学風に反対することを主張する |
| 六、伝統文化について | 尊重しつつも科学によって分析することを主張する |
| 七、西洋文化について | 科学と哲学によって調和し合わせて輸入することを主張し、現在流行している浅薄な科学論を排斥する ^x |

1919（民国8）年2月4・5日に「本報學燈欄大擴充 有宣言見後幅」という広告が一面に出る。この広告は『學燈』欄に二日続けて出された直後の、同月6日から27日まで毎日一面に掲載される^{xi}。4日及び5日に掲載された『學燈』欄の「宣言」においては、前年の1918年9月30日に示された提唱よりも、項目が増えていることに注目したい。

ここに以下のような体裁とする。

- | | |
|-----------|---------------|
| (一) 小言 | 記者の感想を述べる |
| (二) 講壇 | 著名人の著述を載せる |
| (三) 学校指南 | 各学校の内実を明らかにする |
| (四) 青年倶楽部 | 各界の投稿を載せる |
| (五) 科学雑談 | 科学の常識を提起する |
| (六) 翻訳 | 多くの名著の訳を載せる |
| (七) 仏門叢載 | 仏教の古典を探る |
| (八) 学校消息 | 各学校の近況を記す |

(九) 新文芸 新しい体裁の詩文を掲載する
 分類できないものは別に項目を立てる。主義については以下の通りすでに宣言済みである。

- 一．教育主義について 人道主義を広めることを提起し、職業教育としての実用主義で満足しない。
- 二．教育制度について 前例にしたがうだけの制度に反対し、固執して変わろうとしない制度にも反対する
- 三．教育事業について 各種教育の弊害を暴く
- 四．学風について 活発で質実な学風に改造し、現在のやる気のない学風に反対することを主張する
- 五．伝統文化について 尊重しつつも科学によって分析することを主張する。
- 六．西洋文化について 科学と哲学によって調和し合わせて輸入することを主張し現在の皮相的な論を排斥する。

取るに足らない主張であるが、読者の戒めとしていただければ幸いである。^{xii}

それまでは「学校指南」「青年倶楽部」「教育小言」の三項目であったのが、「小言」「講壇」「学校指南」「青年倶楽部」「科学叢談」「譯述」「佛門叢載」「学校消息」「新文藝」と、九項目に増加した。ここではじめて「新文藝」という項目が立てられたことに注目すべきである。つまり、同時期に並行していた「報餘叢載」や『星期週刊撥克』で小説が掲載されていたことを考えれば、『學燈』で新体による詩を掲載するということは、教育としての要請が強かったことを意味している。またここでは、伝統文化と西洋文化をどちらも重視していた。これは五四運動に言及されるときによく言われるような伝統文化の排斥を、むしろ戒めている。重要なのは伝統文化も西洋文化も、科学的な視点から考察することを論じていることにある。つまり、『學燈』欄において、新文学というのは当初は教育目的で始まり、それが浸透するに及んで、純然たる文芸欄としての性格も併せ持つようになったのである。

では次に、『學燈』に掲載された新詩について見てみたい。

四 『學燈』に掲載された新詩——新詩の位置づけと郭沫若

『學燈』の新詩についての評価としては、郭沫若の自伝的小説とされる『創造十年』に、新詩との出会いを描いた有名な箇所がある。郭沫若は留学中の1919年6月に福岡で夏社という文芸結社を起こした。これは留学生仲間と作ったもので、目的は「抗日」と郭沫若が書くほど、五四運動に直接に反応した活動の一環であった。日本の新聞や雑誌に掲載される中国侵略の事項を翻訳して中国国内の新聞に送る、というものであったが、そのために彼は中国の新聞を読んでおく必要があった。そこで彼らが購読したのが『時事新報』であり、ここではじめて新詩と出会うことになった。

こんな無料通信社の仕事をしていたので、国内の新聞を少なくとも一部は購読しないわけにいかなかった。私たちがとったのは上海の「時事新報」だった。この新聞は五

四運動以後大いに革新色を示し、その文芸付録「学灯」は特にこのころ一世を風靡していた。購読を申し込んだのは九月からだったが、最初に送られて来た新聞の上で、私ははじめて中国の口語詩を目にした。誰とかがヨーロッパに行くのを送る康白情の詩だった^{xiii}。

ここで郭沫若は白話詩のレベルの低さに驚いて、自分の過去に作った詩が発表できると確信し「死的誘惑」「新月与白雲」を『學燈』に送ったと記しているが、では、当時『學燈』欄に掲載されている新詩はどのようなものであったのだろうか。『學燈』に「新文藝」という項目が出来るのが1919年2月4日のことであるが、新詩の作品が掲載されたのはこの年の8月15日になってであった。同時期の『新青年』が胡適の作品を「白話詩八首」として掲載したのが、1917年2月1日に刊行された第二巻六号であることを考えても、二年半の遅れがある。『學燈』においての最初の新詩は1919年8月15日に掲載された黄仲蘇の「重來上海」が最初の作品であった^{xiv}。

ここで新詩発表の状況と郭沫若作品の掲載数を簡単に見てみたい。（〔郭沫若の作品数／そのほかの全作品数〕を示し、郭沫若の作品が掲載された日にちを表している。）

1919年	8月	[0首／10首]	
	9月	[3首／9首]	11日・29日
	10月	[8首／12首]	2日・18日・20日・22日・23日・24日
	11月	[1首／3首]	14日
	12月	[2首／3首]	3日・20日
1920年	1月	[12首／3首]	4日・5日・6日・7日・8日・9日・10日・13日 22日・23日・30日・31日
	2月	[6首／9首]	2日・3日・4日・5日・7日・26日
	3月	[2首／8首]	6日・7日
	4月	[2首／6首]	26日・27日
	5月	[0首／1首]	
	6月	[0首／3首]	
	7月	[3首／12首]	11日
	8月	[1首／13首]	28日
	9月	[1首／12首]	7日
	10月	[4首／9首]	10日・16日・17日・20日
	11月	[1首／10首]	4日
	12月	[1首／20首]	1日
1921年	1月	[0首／12首]	
	2月	[4首／7首]	1日・13日・14日・16日
	3月	[0首／17首]	
	4月	[8首／21首]	23日・24日・25日・26日・28日・29日
	5月	[1首／21首]	1日
	6月	[0首／16首]	

7月 [0首／18首]

8月 [2首／29首]

26日・28日

9月 [0首／19首]

問題の康白情の詩であるが、『郭沫若全集文学編十二巻』の注釈にもあるように、1919年8月29日に『學燈』に掲載された「送慕韓往巴黎」という作品である。この作品は以下のようなものである。ただし著者名は「康白清」となっている。

送慕韓往巴黎

慕韓,我來送你來了。

這細雨沾塵

正是送客的天氣。

這樣的風波

我很捨不得你去；

但我並沒有絲毫的意思留你。

你看更險惡的太平洋，

其實再平靜的沒有！

朦朧的日色

照散了漫江的烟霧。

但我覺得這世界還是黑沈沈地。

慕韓,我願你多帶些光明回來；

也願你多帶些光明出去！

聽啊！

這汽船快就要叫了！

他叫了出來

他就要開去；

我們聽了出來

我們就要做去。

慕韓,你去了？

我也要去了！

慕韓、君が行くのを私は送りに来た。

この小雨は塵をしめらせ

まさしく人を送りに行く天気だ。

こんな波風の中

君を行かせるのは忍びない。

でも僕は君をちっとも留めるつもりはない

見てごらん、険しい太平洋を、

本当は静かで何も起きていないのだ！

朦朧とした日の色は

広遠な長江の煙霧を照らす。

しかし、僕にはこの世界がまだ暗く沈んでいるように感じる。

慕韓、君には沢山の光をともなって帰ってきてほしい、

君が沢山の光とともに旅だったほしいのだ！

聴け！

汽船はいまにも叫ぶだろう！

彼は叫ぶんだ

もう出かけると、

僕たちは聞こえるだろう

僕たちはもう行かなくては。

慕韓、君は行くのか？

僕も行かねばならない！

人間関係に対する応答という旧詩の構成をそのまま保っている、この康白情の作品は『學燈』に掲載された新詩としては早い時期にあたる。『學燈』に「新文藝」という項目が出来るのが1919年2月4日のことであるが、新詩の作品が掲載されたのはこの年の8月15日になってであった。同時期の『新青年』が胡適の作品を「白話詩八首」として掲載したのが、1917年2月1日に刊行された第二巻六号であることを考えても、二年半の遅れがある。『學燈』においての最初の新詩は1919年8月15日に掲載された黄仲蘇の「重來上海」が最初の作品であった。郭沫若が康白情の作品に驚いたとあるが、この作品は旧詩にあるよ

うな小雨がしとしと降るような中で友人を送るという題材であり、詩の内容自体も旧詩のままである。口調が口語になっており、出てくる船が汽船であることが、唐詩とは異なっているに過ぎないものと郭沫若が感じたことは否めない。

一方、郭沫若が投稿した作品は、『創造十年』には「死的誘惑」「新月与白雲」を投稿した、と記しているが実際最初に掲載されたものは、1919年9月11日に「抱和兒浴博多灣中」と「鷺鷥」である。同月29日に「死的誘惑」が翌10月2日に「新月」「白雲」と『女神』には一首として掲載された作品が、二つの詩として並んで掲載されている。また、同年12月20日に「夜歩十里松原」によって『學燈』欄においてはじめて「新詩」という項目に分類されたのも郭沫若である。

「抱和兒浴博多灣中」と「鷺鷥」は以下の通りである。

抱和兒浴博多灣中

兒呀！你看那一海的銀波。

夕陽光裏的大海郊彼新磨。

兒呀！兒看那西方的山影罩着沙羅。

兒呀！我願你的心身像海一樣的光潔山一樣的清疏！

我が子よ！見てごらんあの海の銀色の波を。

夕陽の光の中の大海があらたに磨かれているようだ。

我が子よ！見てごらんあの西の山沙羅を羽織っているのを。

我が子よ！おまえの心身があの海のように輝き、山のように清いことを願っている！

鷺鷥

鷺鷥！鷺鷥！

你自从哪兒飛？

你要向哪兒飛？

你在空中画了一个橢圓，

突然飛下海里，

你又飛向空中去。

你突然又飛下海里，

你又飛向空中去。

雪白的鷺鷥！

你到底要飛向哪兒去？

サギよ！サギ！

どこから飛んできたのか？

どこへ向かおうとするのか？

空中に楕円を描いて、

突然海に向かって下降し、

また空に向かって飛んでいく。

突然また海に向かって下降し、

またもや空に向かって飛んでいく。

雪のように白いサギ！

いったいどこへ向かおうとするのか？

この二作品が郭沫若の発表した最初の新詩である。先の康白情の作品が情景描写によって心情を表現しようとしていたのに対し、郭沫若の「抱和兒浴博多灣中」については、自分と世界がつながっている、というテーマ性が既に存在している。子供に語りかけているが、人と人・人と世界の繋がりを重視している、というもので、これは1920年3月19日に掲載されその後『女神』にも収録された「光海」のモチーフと同じである。

光海

無限の大自然，	無限の大自然は
成了一个光海了。	一つの光の海となっているのだ。
到處都是生命的光波，	到るところすべてが生命の光の波で、
到處都是新鮮的情調，	到るところすべてが新鮮な心の調べ、
到處都是詩，	到るところすべてが詩であり、
到處都是笑：	到るところすべてが笑っている。
海也在笑，	海も笑い
山也在笑，	山も笑い、
太陽也在笑，	太陽も笑い
地球也在笑，	地球も笑い
我同阿和，我的嫩苗，	私とかず ^{xv} 、我が愛し子
同在笑中笑。	一緒に笑いの中で笑っている

(後略)

自然界の「到るところすべて生命の光の波で」と謳うこの「光波」は科学用語である。当時は、エーテル概念の中で光はエーテルの中を波として伝わりと考えられていたもので、「光波」という言葉が使われたのである^{xvi}。郭沫若は眼の前に広がる福岡の海を眺め、その自然を描写しているが、同時に単なる自然描写を超えて一つの実感を詩の中に投影している。それは自分の存在する地上もエーテルで満たされており、自分の周囲に溢れる「光波」は同時に「新鮮な心の調べ」であって、詩や笑いとして世界を「振動」させるものである。この「振動」という概念は先に見た「序詩」に表現された「振動数」と同じである。郭沫若自身も自分の子供と共に自然の中であって、響き合う生命としての喜びを享受するというものである。1919年に初めて『學燈』に掲載された作品の中に既にこの考えがまだ洗練されていないとはいえ体現されている。

後者の「鷺鷥」では、『女神』に表れる飛翔のイメージが存在しており、これは後の郭沫若の思想として重要な飛翔の片鱗が見て取れる。1920年1月4日に同じく『學燈』に掲載されその後『女神』にも収録されている「晨安」は以下の通りである。

晨安

晨安！常動不息的大海呀！	おはよう！とどまることなくうねる大海！
晨安！明迷恍惚的旭光呀！	おはよう！目をくらませる朝の光！
晨安！詩一樣涌着的白云呀！	おはよう！詩のように湧き出た白雲！
晨安！平勻明直的絲雨呀！詩語呀！	おはよう！まっすぐ降りそそぐ雨！
	詩のことば！
晨安！情熱一樣燃着的海山呀！	おはよう！情熱のように燃える山海！
晨安！梳人靈魂的晨風呀！	おはよう！魂を梳る朝の風！
晨風呀！你請把我的聲音傳到四方去吧！	朝の風よ！
	僕の声をあちこちにとどけてほしい！

(後略)

ここに紹介する第一連は状況設定である。郭沫若は当時、九州帝国大学に留学中であった。「晨安」のはじまりは福岡の地と考えてよい。風の経路は次のようになる。郭沫若が滞在している福岡から出発し、祖国中国へは地理的に近い揚子江から北上し黄河を北上し、更に万里の長城を越えて荒野を越えて、ロシアにまで北上する。そこからパミール・ヒマラヤと南下シタゴールに会うために、ベンガルに赴いた後、ガンジスを下りインド洋に到達し紅海からスエズ運河を通りナイルに辿り着く。次にそこから地中海を越え、ダ・ヴィンチのイタリア、ロダンのパリからベルギーへ進み、ドーバー海峡を越えてアイルランドへと辿り大西洋を飛び越え、アメリカ大陸に辿り着き、アメリカの偉大な愛国者達の墓標の前に立つ。そして広い太平洋を飛び越え、再び日本に戻ってきて詩が終わる。一本の線で地球を西回りに一周していることになる。朝の太陽よりも早くに地球を西回りに移動することで各地の偉人たちに出向いて朝の挨拶をするという趣向になっている。さらに注目すべきは、その世界一周が、第一連にあるよう単に風に自分の言葉を届けたいというよりも、風とともに詩人自身の魂が世界をめぐるような臨場感をもって表現されていることである。

表現上の技法としては一見すると、飛翔というテーマ自体に大きな差異はないように見えるが、その持っているテーマ性としては康白情が旧詩の典型的な「友との別離」というテーマ設定であるのに対し、郭沫若は近代詩のモチーフが既に認められるのである^{xvii}。このように『學燈』に断続的に発表した作品を中心に、『女神』は1921年8月に刊行されたのである。1918年8月に初めて『學燈』に掲載された当初の新詩は、旧詩にモチーフも形式もまだ近い、新詩としては未熟なものであったが、郭沫若の登場により新詩の発表数も作品のレベルも飛躍的にあがっていった。

まとめ

当初『時事新報』の副刊『學燈』では、科学の導入による近代教育を目指していた。そのため、教育の普及は重要な主張であったので、主張性の高い文章が多く掲載されていたという経緯がある。しかし徐々に文芸欄としての性格を強めていき、更に「新文藝」と言われる文学の中には、郭沫若の作品に代表されるように、科学の言葉によって新たな文学が作られ、その割合は増えていき、『學燈』は総合的な文化欄へと成長した。『學燈』が新文学時期において重要な副刊と言われる理由である。教育と文学との間には、科学は思想として通底していたのであるが、初期『學燈』においてはスローガンにしか過ぎなかった。しかし郭沫若は創作を通じて、文学の中に科学知識を導入することを体現した。つまり当時の近代教育が目指していた理想を先取りして見せたのである。

民国期に西洋的な近代思想や学術が流入した時点でその自然観は変容した。伝統的な自然との一体感というものを、科学用語で語り直したのであり科学的に捉え考えたのである。その伝統的なモチーフを受け継ぎつつも、自然科学によって再構築された自然観に基づく自然の描写を可能にした。しかし、人の心は容易には変わることはできない。科学的思潮を取り入れた近代教育というものが標榜されたとしても、人の心を映す文学は依然として同じであった。時代の要請を体現した郭沫若の眼差しは、近代詩人としての眼差しで自然を眺めた。だからこそ郭沫若は自然観を表現するときに、科学用語を詩的言語として用い

ることで、心象風景の時点から自然を見る眼差しを書き換えた。現在我々が、科学的な知識なしに世界を眺めることはできないが、そのような眼差しを持つにいたった中国の近代詩人の最初の一人が郭沫若なのである。

- i 「無産階級者」「共産主義」という語彙も、当時においては社会科学という新たに中国にもたらされた科学の言葉であった。それが郭沫若にとって、どれほど詩的な響きを持つものであったのかについては稿を改めて論じる必要があるだろう。
- ii 『新青年』は1915年5月に陳独秀によって上海で刊行された。当初は『青年雑誌』という誌名であったが、その翌年に改称した。1917年に胡適の「文学改良芻議」や1918年に魯迅の「狂人日記」などを掲載し、民国期の新文学運動を支えた雑誌である。
- iii 姚福申・管志華共著『中国报纸副刊学』（上海人民出版社、2007年6月）の「第七章 五四运动与副刊改革」参照。
- iv 『時事新報』は1907年に創刊された『時事報』が前身である。1909年4月20日から翌1910年9月23日まで『輿論報』と合併して『輿論時事報』と改称し、その後、1911年5月18日に『時事新報』と改められた。その後は1937年11月27日から翌1938年4月26日まで休刊し、4月27日より重慶で発行、1945年9月27日より上海で刊行され、1949年5月27日に停刊となった。
- v この日は、新聞の張と刷が混乱している。そこで通常の構成と考えて、最初から第一張第一刷、第二刷と数えてある。
- vi 『星期増刊潑克』が刊行されるより前、1918年9月に創刊された『上海潑克』という雑誌の影響がある可能性もある。『上海潑克』は沈泊塵創刊による漫画雑誌であったが、沈の死去により僅か四期で廃刊になったというが、こういう雑誌が存在していたことについては陶冶『中国の風刺漫画』（白帝社、2007年6月）第一章「現代中国政治漫画前史」の中の「中国最初の漫画雑誌—『上海潑克』と沈泊塵」に詳しい。新文学の台頭の時期に、こういう雑誌が存在していたことは、互いの雑誌や新聞に影響があったであろうことは見落としてはいけない事実である。なお、この『星期増刊潑克』に掲載されている一コマ漫画の多くが、沈泊塵の名前が認められる。
- vii 今回確認出来たのは、1921年5月20日の『時事新報文学旬刊』第二號からである。
- viii 確認できた1月24日～3月3日までのうち、掲載のないのは1月29日、2月3日、5日～13日、16日、23日、27日、28日、3月1日、2日。
- ix 原文は以下の通り。

本報特設學燈一欄預告

本報同人慨夫社會之銷沈青年之墮落以爲根本救治之策惟教育事業是賴爰將原有教育界爲是擴張更名曰學燈內容計分（一）學校指南 掲載教育法令學校章程視學報告等以爲辦學者及求學者之南針（二）青年俱樂部 專備各校教員及學生諸君之投稿凡有益青年心身者內容不拘門類文字不拘長短均所歡迎（登出者酌具贈品）（三）教育小言 用以煥發興會輔助修養凡此數端皆同人所願竭其棉薄以爲貢獻者非敢自詡爲學界之明燈 然亦期不負初衷區區微意幸海內外明達有以教之特此預告

- x 原文は以下の通りである。

本欄之提倡

本報自關學燈一欄以來投稿者絡繹不絕大都各抒所見以貢獻於社會惟本報猶願於各主

張之中特標其注重之所在以讀者醒目而投稿諸公或亦有選擇也

- | | |
|---------|-----------------------------|
| 一．於社會主義 | 提倡道德感化之人格主義以爲職業教育之實用主義之輔助 |
| 二．於教育制度 | 反對抄襲的制度與反對固執不化之制度 |
| 三．於教育事情 | 揭穿各種教育流弊 |
| 四．於教師 | 主張改造以身作則之良教師反對現在與惡社會同流合汚之教師 |
| 五．於學風 | 主張改造活潑樸實之學風反對現在萎靡不振之學風 |
| 六．於原有文化 | 主張尊重而以科學解剖之 |
| 七．於西方文化 | 主張以科學與哲學調和而一竝輸入排斥現在流行之淺薄科學論 |

^{xi} 2月7日以降、『時事新報』一面に掲載される文章は、ほぼ「宣言」に同じだが、若干異なるので、以下に記す。

本報學燈欄擴充爲兩頁。其理由有二。一曰小説項聞。其目的在有趣。熟意每日閱之。其趣因熟見而不鮮矣。不如不常見之爲愈也。故決定移置。每星期日之潑克增刊中。二曰教育新聞。向在要聞欄掲載。非特有時被擠。而且地位有限。不能詳盡。不如移置於學燈。可以自由披露。以此二理由。則學燈不能擴充也。查本報自上年特設學燈一欄以來。極爲學界所歡迎。現特請專家主任此欄。擴充爲兩頁。分門如下。1小言（述記者之感想）2講壇（載名人之著述）3學校指南（詳各校之內容）4青年俱樂部（登各界之投稿）5科學叢談（揭科學之常識）6譯述（載多譯之名著）7佛門叢載（搜佛教之遺著）8學校消息（記各校之近事）9新文藝（載新體之詩文）等門。再本報向例優待學校。直接郵寄上海望平街本館 定報者均七折計算。但須有學校圖章爲證。此白。

^{xii} 原文は矣の通りである。

茲定體裁爲下列各種。

- | | |
|-----------|--------|
| (一) 小言 | 述記者之感想 |
| (二) 講壇 | 載名人之著述 |
| (三) 學校指南 | 詳各校之內容 |
| (四) 青年俱樂部 | 登各界之投稿 |
| (五) 科學叢談 | 揭科學之常識 |
| (六) 譯述 | 載多譯之名著 |
| (七) 佛門叢載 | 搜佛教之遺著 |
| (八) 學校消息 | 記各校之近事 |
| (九) 新文藝 | 載新體之詩文 |

其有不能歸類者。另立一門焉。至於主義。則早有宣言。

- | | |
|----------|--------------------------|
| 一．對於教育主義 | 提倡道人格主義。不以爲職業教育之實用主義爲滿足。 |
| 二．對於教育制度 | 反對抄襲的制度。與反對固執不化之制度。 |
| 三．對於教育事情 | 揭穿各種教育上之流弊。 |
| 四．對於學風 | 主張改造活潑樸實之學風。反對現在萎靡不振之學風。 |
| 五．對於原有文化 | 主張尊重而以科學解剖之。不以謾罵爲了卸能事。 |
| 六．對於西方文化 | 主張以科學與哲學調和而一竝輸入排斥現在之皮相論。 |
- 區區之主義。幸讀者鑒焉。

^{xiii} 郭沫若『創造十年』147頁（『黑猫・創造十年他 郭沫若自伝2』小野忍・丸山昇訳、平凡社、1968（昭和43）年11月）より。

^{xiv} 黄仲蘇の作品は一行目と二行目に「(一)」が挿入されているが、恐らく誤植であろう。

^{xv} 詩の中に記載される「阿和」は郭沫若の長男の郭和夫（1917-1994）を指す。「阿」は

人に関わる語彙の前に置かれ、親しみを表す。ここでは「かず」と訳出した。

^{xvi} 『最新知識 百科大事彙』（日本図書センター 2002.1 復刻・日比谷書房刊 1918 年）「第五十編 最新科学 第二章 無線電信電話 第二節 エーテル振動」では「凡そ光がエーテルの振動であって、毎秒凡そ七万六千四百里の速度を以て遠く伝播するということは太陽星等より伝播さるゝ光線の研究に依つて学者間に異論のない所である。而して電磁波現象も亦エーテルの振動に基づく事は、マックスウェル氏の卓説として業に読者も知るところである」と述べられている。

^{xvii} 武継平は『異文化のなかの郭沫若—日本留学の時代—』「第二部第六章 郭沫若の初期文学論考」（九州大学出版会、2002 年 12 月）において、「抱和兒浴博多灣中」についてタゴールの影響を検証している。